

環境省 モニタリングサイト 1000 国際シンポジウム
アジア・オーストラリアを渡る水鳥たちのフライウェイ ～そのモニタリングと国際連携～
パネルディスカッションの概要

座長：バードライフアジア会長 市田則孝

パネリスト：豪州シギチドリ類研究会 ロバート・クレメンス

日本湿地ネットワーク副代表 柏木実

日本野鳥の会 東京港野鳥公園チーフレンジャー 金井裕

日本雁を保護する会会長 呉地正行

韓国環境省国立生物国立資源研究所 キム・ジンハン

WWF ジャパン自然保護室主任 花輪伸一

環境省自然環境局野生生物課長 星野一昭

【座長】 今までの講演を聞いて、ロシアの東半分を含んだ東アジア地域からオーストラリアにおける、繁殖地、中継地、越冬地を含んだ水鳥のカウントや渡りのルートはどうやって調べているのかという事が良くわかったと思う。しかし、実際にやってみると、どうやって正確なデータを取るのか等、課題が出てくる。課題は大きく分けて、3つあり、1つはどうやって行うのかという方法論。2つめは誰が行うのかという人材の問題、3つ目は何をこなすのかという内容の問題に集約されるだろう。この3点について皆で考え、どういった解決策を出していくかを考えたいと思う。

1. 調査方法(調査地点の設置や調査時期、調査頻度等)について

- ・オーストラリアでは、全ての生息地をモニタリングするのは、時間や資金、人の面で難しい。そこで、調査地の優先順位をつけ、より調査すべき場所から調査を行っている。優先されるのは、調査地として安定しているや、生息する個体群が危険にさらされている場所だろう。また、出てきた調査結果は統計的に処理している。
- ・日本の場合は、渡りの中継地であるので調査時期の選定が重要。

2. 人材の確保について

- ・自然再生・保全に対する意識は高くなってきているが、そういった意識の高い人がカウント調査に参加してもらえるような連携が取れていない。
- ・渡り鳥そのものだけでなく、その生息環境である干潟や湖沼を守ることにつながっているという、調査の意義を伝える必要がある。その方法としては、会議や集まりで伝えるのと同時に、現場で一緒に数えるといった事をするのも有効ではないか。
- ・興味を持たせるには広報をしたほうがいい。バードウォッチャーのイメージアップを図るべし(会場から)
- ・来年は生物多様性条約の締約国会議があるので、そういった機会を生かしていくべき。
- ・韓国ではスキルの無い人がスキルのある人の所で学べるよう、複数人でチームを作って調査をしている。モニタリングに関するスキルアップに関しては、フィールドでの専門家の参加も必要になってくる。
- ・モニタリングサイト 1000 では、技術や調査精度の向上のための、調査結果の共有や意見交換を行う調査員の交流会を毎年各地で行っている。
- ・方法をマニュアル化させて次世代に伝えていくのも重要。

3. 国際連携で何を行うべきかー情報共有とネットワークキングー

- ・渡り鳥のモニタリングには、一調査地だけを見るのではなく、情報共有を行い、全体で個体数がどうなっているかを見る必要がある。
- ・日本ではモニタリングサイト 1000、韓国には 1 月の全国水鳥一斉調査、オーストラリアでは 1981 年からモニタリングプログラム、アジア全体ではAWSがデータをまとめている。データの蓄積はあるが、そのデータを関心のある人が入手できる状態にない。
- ・情報の基の基、「情報源情報」を整理すれば関心のある一般の人も簡単に利用できると思う。その際、言語は共通の言葉としてデータを英語にしたりして、世界中の多くの人が使いやすいようにデータをまとめていく必要がある。
- ・単に個体数変化のデータを共有するだけでなく、生息場所の環境データ(土地利用の情報や気象情報など)の共有や、環境を保全している団体全体で相互に協力し合うための、ネットワーク作りも必要。
- ・国際的にだけでなく、鳥類や気候変動など色々な事を含めた国内でのネットワーク作りもしていかななくてはならない。
- ・つながりを持っていく中で、各自がやっていることの意義がより大きくなってくだろう。
- ・東アジア・太平洋オーストラリア地域フライウェイパートナーシップという既存の国際的な枠組みを活用して国際協力を進めてゆくのがよいだろう。
- ・協力する内容としては、種を決めたりなどの具体的な方向性が必要なのではないか。シギチドリ類では、ハマシギがとともよい材料だろう。日本では一番多い種であるが、国内でも数が減ってきている。また、東南アジアまで飛んでいるし、他にアメリカやオーストラリアなども関心を持っている。
- ・ガンカモ類ではマガンを軸にしてやるといいかもしれない。繁殖地はロシア、韓国、中国、日本まで渡ってくる上、最近個体数が韓国、日本で増えてきている。これは越冬地の環境の変化もあるが、繁殖地の温暖化の影響という可能性もあり温暖化のモニタリングにも役立つ。
- ・昨年、フライウェイパートナーシップの会議があり、そこで本部を韓国のインチョン(仁川)に置くことになった。韓国政府も支援をしており、場所の提供なども行っている。フライウェイの事業として、ウェブを作り、そこにデータをまとめることを世界に先駆けて行うよう韓国に持ち帰って、提案したいと思う。

【環境省】 来年は生物多様性条約の締約国会議が名古屋であるが、科学的な基盤を整備し、さらにそれを補強するためには、アジアでのモニタリングの連携を行っていくべきであると考えている。今回の意見を踏まえて、COP10 に向けて立派なものが打ち出せるようにしていきたい。